

丹波栗と足利義詮の伝説

井 上 三 義

丹波と言えば栗を連想するほどに、丹波と栗とは深い因縁がある。古くから丹波栗の名産地として京都府船井郡和知や兵庫県氷上郡山南町（旧小川村）等が知られている。このたび山南町の郷土名物として「クリセンベイ」が発売される計画があり、小川村産のテテウチグリと足利義詮との伝説について室井緯先生からぜひ報告せよとのことであるから以下それについて簡単に記してみよう。

テテウチは氷上郡山南町岩屋の原産である。観応2年正月16日（今より約600年前）足利義詮は、15日の戦に桃ノ井の軍を破つて大勝したが、諸人の推量と異なり京都勢の大半が15日の夜半に八幡山にいた三条慧源の下にはせ集まつたので、もはや浴中で再び戦う能わずとさとり、西国に退いて兵を養おうと思い16日早朝京都を出発し丹波路へ落ちのびた。父尊氏は西下したけれども名將がーカ所に居るのは却つて不利であるとして義詮は父尊氏と分れて2,000余騎を従えて井原郷石龜（現在の山南町岩屋）に留つた。ここにある足利橋は其橋下に義詮がかくれて追手の難をまぬがれたところで、ここから岩屋に向つたという。

往時の石龜寺は現在の寺の奥の院であつて登るのも容易でない険峻の地にある岩窟であつた。義詮を迎え

た石龜寺の衆徒は護摩をたいて將軍の武運を祈つた。その満願の日、院主雲曉僧都は足利將軍に對面して、天下を静め大敵を亡ぼすの要諦は毘沙門天の法に及ぶものはないと進言したので義詮も熱心に信仰して丹波国小川庄を寺領として寄進した。

雲曉僧都がこの地の名物だとして大栗を献上したところ義詮は、只一果を残して皆部下兵卒に分ち与え、さて残した一果の栗の座に手ずから爪痕をつけて「都をば出て落ち栗の芽もあらば、世に勝ち栗とならぬものは」という一首をそえて雲曉僧都に渡し栽植するように命じた。発芽せば都に出たと知れ、結実せば天下を領したと知れと言つた言葉にたがわず、何れの果実にも爪痕のある栗がなつたと言ひ伝えられている。

元來本種は果梗強く容易に果が脱落しないために、成熟した果実ばかり出て落ちるので、テテオチ即ちテテウチと言われるようになったのである。このクリの果の座の中央にある爪痕は実は維管束の痕である。この地は岩屋の名にふさわしく全山が岩盤で出来上つているから根の發育が妨げられて、このような爪痕を生ずるらしく、肥沃土に栽植すると次第に之が減つて来る。このクリは品質上等で10月中下旬に熟する。